

I 今年度の取組と自己評価

1 教育活動への取組と自己評価

(1) 学習活動

今年度の取組目標	自己評価
ア 生徒の学習意欲を向上させるため、質の高い授業を創造する。	・一人一台端末を活用し、主体的・対話的な学習活動を展開した。 ・年次研修対象者を中心に年間3回研究授業を実施し、授業力向上を図った。放課後の時間を活用し、研究授業について意見交換を行い、成果を教科内で共有した。指名制の授業見学や模範授業等を活用し、積極的に外部の授業見学を行い、教え込みではなく主体的・対話的で深い学びを意識した授業展開ができるよう取り組んだ。 ・年に2回、生徒による授業評価を全教科で行い、データを共有し授業改善につなげた。指導部高等学校教育指導課統括指導主事を講師に招き、観点別学習評価に関する校内研修を実施し、学校としてルーブリック作成に取り組んだ。次年度以降、事前に生徒に示すことによって生徒の達成目標が可視化され、形成的評価へとつながると考えられる。 ・ALTの配置やJET2名配置により、より authentic な英語学習環境を提供した。土曜授業がなくなるため、授業の質を高め、授業時間の確保に取り組む必要がある。
イ 教科マネジメントを確立し、組織的に生徒の学力向上に取り組む。	・毎月1回教科会を年間行事計画の中に位置付け、指導内容や進度、学力向上のための方策を検討し、共有した。 ・次年度の教育課程の変更に伴い、授業内容の検討を進めた。週ごとの指導計画を作成し、授業を展開した。 ・入学者選抜結果や模擬試験において本校の強みと弱み等について、教科や学年内で共通理解を図り、総合的な学力バランスを育成した。 ・自主学習時間を延ばすため、チューターの配置や書架の設置等、自習室の整備を進めた。生徒の学習総時間を考え、他教科の学習時間にも配慮した課題設定を行う必要がある。 ・すべての教科・科目で定期考査問題を共通化し、組織的な教科指導を行った。
ウ 東京都の教育施策を見据えて、新たな教育課題に対応する。	・オンライン英会話を活用し、「聞く」「話す」等4技能の育成に重点を置いたきめ細かい指導を実施した。また、英検の外部会場として、生徒に積極的に受検を呼びかけるとともに、希望者には試験前の補習や面接指導も実施した。 ・理数研究校では、東京農工大との連携、スーパーカミオカンデの見学、工学院大学の見学と教授の講話、鹿の解体実習等を行った。また、天文地球科学部では板橋区教育科学館と連携した活動を行った。 ・都の高大連携事業成果発表会において、生徒3名が大学連携の取組を発表した。Tokyoサイエンスフェア（科学の甲子園東京都大会、研究発表会）に、参加し、日頃の教育活動の成果を発表した。

エ デジタル技術を活用した教育を推進する。	・グループ学習や調べ学習で資料検索や作成に活用するなど、一人一台端末を有効活用した。年に1回オンライン学習デーを設定し、不測の事態でも学びを止めない対応ができるよう訓練した。授業の中でのタブレットの更なる活用が今後の課題である。 ・9割の教員がICTを活用した授業を行っており、一部では小テストや課題提出においてオンラインを活用している。 ・行事終了後にFormsを活用したアンケートを実施した。また、保護者会や進路ガイダンスなどを校内でオンライン配信するなど、日常的にオンラインを活用している。
-----------------------	--

(2) 進路指導

今年度の取組目標	自 己 評 価
ア 生徒の第一志望の実現を図る進学指導を行う。	・模試分析会や教科会を活用し、担当教科に関する生徒の成績推移等の情報を共有した。受験へのストレスにも配慮しながら、学校行事や部活動等を最後まで熱心に取り組ませる指導を行う。 ・適宜、進路通信を発行した。保護者会だけでなく、学年通信等で情報提供を行った。 ・進路ガイダンスや模試分析、外部講師の講演や振り返り等、組織的な進路指導を行うことができた。調査書の点検等において、不十分な内容があった。 ・模試の結果等をタブレットで提示しながら面談を実施した。進路面談において、学年や担任によって差が見られるため、改善が必要である。 ・夏期特別講習を実施し、普段の授業よりもハイレベルな内容を意欲ある生徒に取り組ませることができた。また、学習内容の定着だけでなく自学姿勢などを身に付けさせることができた。 ・「信州北園プロジェクト」では、将来の進路選択を視野に入れながら探究活動を進めさせた。 ・保護者会や保護者向け進路講演会を実施し、大学入試の現状や保護者へお願いしたいことを伝え、学校と家庭が共通理解をもって進路指導に取り組んだ。
イ 1学年より3年間を見通した系統的、組織的な進路指導をきめ細かに行う。	・進路指導計画を毎年度見直し、進路の手引きに掲載することで、PDCAを行えるようにした。 ・外部模試の実施前に課題を課し、返却時に学年集会を実施する等、事前事後の指導を行った。模試分析会では、学年の担当者の参加を悉皆とし、課題把握と解決に取り組んだ。 ・新入生セミナーや夏休みのオープンキャンパスを通じて、大学の教育内容についての理解を深めるとともに、進路指導計画に沿って、各学年で組織的に進路指導に取り組んだ。また、大学の公開講座やオープンキャンパスの情報を掲示し、キャリア教育を行った。
ウ 学力向上のため、長期休業日中の講習の参加生徒の増加を目指す。	・1・2年夏期特別講習は、1年49名、2年54名の計103名が参加した。講座内容の満足度も高く、夏期休業開始直後の実施効果もあったが、参加者が減少したことが課題である。次年度は、1年生で、施設設備が整った会場で勉強合宿を実施し、長時間勉強に取り組む習慣を身に付ける。2年生は、校内で夏期特別講習を実施し、多くの生徒が参加しやすい環境を整える。

	・夏期講習をターム制に変更し、申込時期を早めることで、多くの生徒が受講しやすいように設定した。加えて、レベルや分野・単元に応じ複数の講座展開を行った。結果、夏期講習だけで、100講座以上設定することができた。 ・校内予備校や自習室の整備などにより、3年生で最後まで学校を活用しながら学習する生徒が多数見られた。
--	--

(3) 生活指導

今年度の取組目標	自 己 評 価
ア 規律ある学校生活の中で自立の精神を培うよう、全教職員が一致して指導を行う。	・各学年3回以上の生徒面談を通し、生徒理解を深めた。また、学年ごとの遅刻指導を行い、改善に至らない生徒に対して、生活指導部の指導を行った。 ・考えさせる指導を通じて、生徒の規範意識を高める指導を継続する。 ・2学期以降授業開始が遅れることがあったが、次年度から45分×7限授業になるため、授業開始時刻を厳守する必要がある。 ・集会や式典の機会や朝の立ち番等により、生徒への働きかけを行った。 ・SNSのトラブルはセーフティ教室や北園SNS活用注意点等の啓発により今年度0件であった。
イ 生徒が安心して学校生活に取り組めるよう、教育環境を整える。	・いじめアンケートを年3回実施した。また、学校いじめ対策委員会を実施し、組織的に対応することができた。学校評価アンケートにおいて、「体罰や暴言のない指導を実施している」の項目において、教員、生徒、保護者の肯定的結果が100%になるよう校内研修を充実させる必要がある。 ・コロナ禍後も感染症対策に留意しながら、地域との連携も図り避難訓練・防災訓練を4回実施した。また、防災活動支援隊による炊き出し訓練、全校集会における報告を行った。今後は、状況に応じた避難ができるよう訓練する必要がある。 ・空き時間の教員等で、適宜校内の見回りを行い、不審者の早期発見や事故未然防止に努めた。 ・会議やメール、校務連絡等により教職員への注意喚起を行った。施錠忘れ等、一層の意識の徹底が必要である。 ・毎朝、校門での交通整理を行い、生徒の登校状況を確認した。板橋区立第四小学校児童と通学路を分けることで、小学生と高校生の通学路を確保し、円滑な登校に繋がった。自転車登校者に対して、ヘルメット着用の声かけを行っていく必要がある。

(4) 特別活動・部活動

今年度の取組目標	自 己 評 価
ア 文武両道を推進し、学校行事や部活動を通して、生徒の帰属意識を高め、学校生活を充実させる。	・文化祭、体育祭など行事を生徒主体で企画運営させ実施した。生徒の学校行事への満足度は高い。 ・生徒主体の企画は行われているが、一層円滑な進行に向けて、行事の振り返りを充実させ、より良い内容にしていく。 ・生徒自身の自主・自立の意識は高い。教員の指導力向上により、さらなる意識の向上が必要である。 ・部活動単位での地域行事への参加を実施した。 ・生徒会は定例会を週1回開き、校内外の諸課題に取り組んだ。今年度

	は、特に、学校説明会手伝いやボランティア等に取り組んだ。
イ 部活動を通じて、ルールを順守する態度を身に付けさせると共に、目標に向かって協力し、努力する態度を育成させる。	・部活動加入率108%で例年並みの加入率となった。部活動を通じて帰属意識を高めることができた。 ・平日と土日に1日ずつ休養日を設け学習とのバランスを取り活動をするよう促し、ほぼ全ての部活動で適切に実施されている。下校時間の遵守など、徹底する必要がある。 ・教員に対する注意喚起及び部活動指導員に対する研修の実施を進めた。 ・学校ホームページの部活動のページを適切に更新した。

(5) 美化・健康づくり

今年度の取組目標	自 己 評 価
ア 生徒の心身の健康に配慮した教育活動を行う。	・定期健康診断を計画通り実施した。 ・セーフティ教室を通じて、交通安全や薬物乱用防止の意識を高めた。 ・保健や家庭科の授業等で健康に関する意識の向上を図った。 ・専門医派遣事業を4回実施した。年間相談件数は73件。学年ごとに出席時間と相談ケースを事前に調査確認することで、担任の出席率が増加した。スクールカウンセラー、養護教諭、特別支援コーディネータからの情報提供と共有を強化し、生徒対応の仕方の示唆を受けた。都立学校版コンディションレポートを3回実施し、発信した生徒に対して、相談カードを発行し、SCにつながることもできた。通級指導や発達障害の生徒支援、別室対応などを行った。教員対象の校内研修会を9月に実施した。 ・集会や式典等の機会を活用し、安全安心について生徒に働きかけを行った。 ・感染症予防については継続的に注意喚起を行っている。 ・1学期に体力テストを実施した。
イ 快適な学習環境維持のため、校内美化や保健衛生に努める。	・保健便りの発行を適宜行った。 ・大掃除を年5回実施した。 ・エピペン及びAEDの使用に関する校内研修を実施した。 ・コロナ禍よりSDGSやエシカル消費の観点からゴミ箱の設置を見合わせ、ゴミの持ち帰りを推奨した。結果、害虫の発生を防ぎ教室や校内の美化につながった。

(6) 募集・広報活動

今年度の取組目標	自 己 評 価
ア 広報活動を工夫し、組織的かつ戦力的に進めることで本校を第一志望とする生徒を獲得する。	・行事等の広報等をHPにより行ったが、更新の内容及び回数が不十分である。教育活動の情報発信を組織的に取り組む。 ・本校教育活動の全体像を理解した受検生を確保するため夏期校内ミニ見学会を10回実施した。(参加者1303名) 学校見学会参加者1000名、校内説明会3回1366名、その他2756名、総参加者6425名であった。次年度に向け、酷暑対策や地域の精選を図り、効果を上げる。 ・一部の部活動で体験入部を実施した。 ・生徒会生徒を中心に、定期的に板橋区立第四小学校の算数ボランティアを行った。 ・全教員で学校見学会や説明会の対応に取り組んだ。

(7) 特色ある教育活動

今年度の取組目標	自 己 評 価
ア 海外学校間交流推進校、国際交流リーディング校としての活動を充実させる。「学校 2020 レガシー」として、相互交流を中心とした豊かな国際感覚を育成し、国際理解教育を推進することで、世界で活躍できる人材を育成する。	・オーストラリア語学研修を実施した（26名参加）。ホームステイと語学研修を通して交流を深め語学力や国際感覚を身につけ、充実した時間を過ごした。事前事後研修を通して、英語学習へのモチベーション向上につなげた。継続性が課題である。オーストラリア・ウヌーナ高校から9名の生徒が来校しホームステイや1日学校体験を実施した。 ・ドイツの姉妹校との直接の交流は、今年度は実施されなかった。 ・ドイツPASCHを契約更新した。JUKU奨学生として2名の生徒がドイツ短期研修へ参加した。企業・大使館訪問へは延べ12名が参加した。企業や大使館の仕事内容や環境、自らの将来などについて考える機会として効果があった。PASCH校同士や企業との日程調整のため、本校生徒としては考査直前などで参加できない企業訪問があった。 ・リセとの交流を実施した。 ・ドイツ語検定合格率向上のため、対策講座の実施を行った。今後講座とともにプレテストを実施する。また、海外語学研修の事前研修について、さらなる効果の期待できる業者プログラムの実施予定である。
イ 「信州北園プロジェクト」によるキャリア教育・環境教育、探究活動を充実させる。	・新入生セミナーは都内国立大学との連携による進路セミナーへと発展させ、低学年からの意識啓発を進めた。 ・「信州北園プロジェクト」では関係機関と連携し、一定の内容の活動ができるようになっている。探究活動の内容が例年似た内容になっており、長期的なテーマを設定するなど工夫と内容の検討が必要である。探究学習の円滑な実施のため、各学年の学年担当と探究担当が「探究コーディネータ」として協働し、運営体制を構築した。また、探究コーディネータは、担当学年の講座担当を兼任せず、「探究」の時間の共通講座を実施し、講座担当の補助を行った。

(8) 学校経営・組織体制

今年度の取組目標	自 己 評 価
ア 進学指導推進校としての組織的な学校運営を推進し、協働体制を確立する。	・学校評価アンケートで、生徒、保護者、教員で大きく差のある項目が課題となる内容である。評価の在り方については、観点別評価や指導と評価の一体化について、毎年見直しを行い、ブラッシュアップしていく。生徒の自宅学習時間を確保する方策として、自習室を整備したことで、利用者が令和5年度から4倍近くに大きく増加した。また自主学習支援事業を活用し、自主学習支援員への質問回数が、令和5年度から3倍近くへと大きく向上した。学校で自学自習の習慣を付けることができた。 ・主幹会議を中心に、次年度の教育課程変更に向けた課題を整理し、企画調整会議にかける形を作った。 ・拡大分掌部会の実施が少なく、学年・分掌間の情報共有は、教員同士が個人的に行うことが多かった。次年度は、必要に応じて拡大分掌部会を設定する。 ・教科主任会を定期的開催した。教育課程の大きな変化に対応し、教務内規の変更も含め、次年度に向けて体制づくりを行うことができた。

	・創立百周年に向けてPTA及び同窓会と準備委員会を組織し開催した。
イ 働き方改革を推進する。	・庶務事務システムで毎日の出退勤時刻を「見える化」することにより、業務の精選や効率化について教員の意識を高めた。企画調整会議で業務削減や超過勤務削減を呼びかけた。 ・メールの活用により、校務の連絡が円滑に行われるようになった。校務サーバの活用については、利用ルールの策定等により、だれもが使いやすいようにしていくことが必要である。 ・会議はおおむね勤務時間内に終了している。 ・副校長の指導や企画室担当のシステム操作案内により、庶務事務システムを円滑に運用できるようになりつつあり、週休日等の振替申請や休変の取得が、概ね適正に処理できた。 ・超過勤務の職員を確認し、産業医面談を実施した。自己申告で、主幹教諭や分掌主任に、業務見直しを指示するとともに、業務過多の職員へのフォローを依頼し、定期的に対応した。
ウ 教職員の資質・能力を向上させ、進学指導推進校として教育活動を充実させる。	・各分掌で新規採用教員・若手教員に対してOJTを実施した。リアテンドラントや授業・行事のオンライン配信等の業務内容について成果があった。 ・指導部の指名制の授業研究（11回）、指導教諭の模範授業（3回）、その他1回を活用し、積極的に外部の指導者の指導方法を学び、教科会等を活用して共有した。1、2年生は年間を通じて校内予備校を設定し効果的に運用した。3年生は、受験対策講座を複数設置し、生徒のニーズに対応した。加えて、校内予備校の講師授業を自由に参観できるようにし、日頃の指導との連携を図った。 ・教員から広く体罰根絶に向けたメッセージを募って体罰根絶を目指すポスターを作成し、職員室の見やすい場所に掲示した。 ・服務事故防止研修及び日頃の注意喚起を行っている。
エ 経営企画室の経営参画を推進し、業務を円滑に遂行する。	・年度当初に事務処理方針を策定した。 ・自律経営推進予算については、スケールメリットを念頭に、センター集約執行を基本とした計画的執行を行った。 ・就学支援金を含む授業料徴収事務については、全ての債権回収を3月初旬までに確定することができた。 ・職員間の連携はおおむね良好である。 ・施設・設備・備品の更新については、不具合の把握や修繕については迅速に対応したものの、物価上昇等に伴う予算不足により、中長期的な見通しを立てられない状況である。

2 重点目標への取り組みと自己評価

重点目標	具体的な数値目標と結果	評価
(1) 生徒の学力を向上させる。	ア 学年+1 時間の自主学習時間を確保している生徒の割合 50% [57.9%] イ 大学入学共通テスト全国平均上回り率 教科平均 1.18 [1.14] ウ 実用英語技能検定の3年次合格者 2級以上 160人 [147名]、準1級以上 20人 [28名] エ 長期休業期間中の講習・補習開講数 100 講座以上 [134 講座]	◎ △ ○ ◎

(2) 進学指導推進校としての進学実績を向上させる。	ア 国公立大学現役合格者 60名〔68名〕	◎
	イ 大学入学共通テスト出願率 95%〔96.1%〕、5(6)教科 7科目受験 45%〔55.2%〕	◎
(3) 生徒の基本的な生活習慣を確立させる。	ア 遅刻者数各クラス1日平均 1人以内〔1.36人〕	○
	イ 部活動加入率 100%〔108%〕	◎
(4) 募集対策を充実させる。	ア 学校説明会・学校見学会来場者数 5000人〔6425人〕	◎
	イ 入学者選抜【推薦に基づく選抜】応募倍率 3.60倍〔2.61倍〕	△
	ウ 入学者選抜【学力検査に基づく選抜】応募倍率 1.80倍〔1.90倍〕	◎
(5) 学校評価アンケートにおける教育活動への満足度を向上させる。	ア 満足できる授業 80%〔生徒 80.0%、保護者 75.4%〕	○
	イ 第一志望実現を支援する進路指導 80%〔生徒 85.9%〕	◎
	ウ 生徒と向き合う生活指導 80%〔生徒 74.3%〕	△
	エ 教育相談の整備、校内美化の取組 80%〔生徒 78.5%、82.6%〕	○
	オ 学校行事の取組・部活動満足度 80%以上〔生徒 94.1%、88.7%〕	◎
	カ ホームページによる適切な情報発信 80%〔生徒 68.1%〕	△
	キ 国際理解教育の充実度 80%〔生徒 91.1%〕	◎
	ク 「信州北園プロジェクト」による人間力育成 80%〔生徒 75.8%〕	△

◎ 達成 ○ ほぼ達成 △ 未達成

Ⅱ 次年度以降の課題と対応策

(1) 教育活動の質を向上させる

- ①学校評価アンケートの回収率が高まり、授業への満足度を把握することができたが、目標達成しているとは言えないため、校内研修や模試分析会等で本校の課題を把握し、研究授業等をとおして授業改善や授業力向上を促していく。また、教え込み型の授業ではなく、主体的、対話的で深い学びを実現できる授業展開ができるようにしていく。
- ②指導部から講師を派遣し、観点別評価に関する校内研修を実施し、観点別評価を見直し、各教科のルーブリックを作成した。各観点の評価のバラつき等の課題が散見されるため、より適切な評価ができるよう引き続き校内研修を実施していく。
- ③1・2年生については、家庭学習時間が目標時間（学年＋1）に到達したが、まだ十分とは言えない。自習室活用等を促進し学習時間の定着を促す。
- ④各教科の課題の量の調整に関する問題提起がなされるが、課題提出の時期や課題の質に関しても教科会等で検証する必要がある。
- ⑤進路アンケートの結果、多数の生徒がスマートフォンに多大な時間を費やしている結果が出た。次年度1年生から手帳を活用し、時間管理意識についての指導を行っていく。
- ⑥一人一台端末の活用に関しては、先進校の活用状況等を参考として、活用を推進していく。教科間でも差があり、進んでいる教科の事例を共有し、活用を推進する必要がある。
- ⑦令和7年度より、土曜授業を廃止し、45分×7限授業とするためのシステムや校内体制づくりを推進した。45分授業の授業満足度を高める必要があるため、どのように授業の内容を充実させ魅力あるものにしていくのか、校内研修等で具体策を出していく。
- ⑧長期休業日の始期終期を変更し、夏季休業期間を短くして文化祭準備期間を確保した。学校行事を充実させるとともに、冬季休業期間が延びた時間を利用して、講習等の時間を確保し、3年生の受験対応等を充実させていく。

(2) 生徒の高い進路希望を実現する

- ①国公立大学進学実績については入学時から意識づけを行い、苦手科目を諦め、科目を絞るような安易な進路選択をせず、幅広く学習することで教養主義を貫き、国公立進学を目標として学習に励むよう指導して

- いく。特に、生徒の高い志を最後まで維持させ、途中で諦めさせないようにする。
- ②長期休業中や放課後、大学入学共通テスト後の時期等、講習や添削指導などのきめ細かい指導を行い、生徒の進路希望実現に向けて尽力した。また、集会等を活用し全体で進路指導を行うことで、クラス間の差を無くし、全体の進路意識を醸成した。学校を頼り、学校を中心とした集団で受験に臨む気持ちを醸成していく。
 - ③模試分析会の内容を見直し、解答用紙の分析を行うとともに関係職員の参加を悉皆として、職員の進路指導に対する意識を醸成した。教科主任会で、模試分析会を活用した授業改善を推進していく。
 - ④長期休業中の講習の設置方法をターム制に見直し、教科担当の自己都合ではなく、教科として計画的に講習を設置した。生徒が学校の講習を利用しやすいように設定し、生徒が予備校ではなく、学校の講習で進路実現に向けて取り組むようにしていく。
 - ⑤「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱をバランスよく育成する授業改善を進めるとともに、入試問題の分析も推進する。
 - ⑥学校経営計画の数値目標として、国公立大学進学を掲げ、生徒や保護者に周知するとともに、広報活動にも取り入れ、中学生の進路選択時に本校の方針を理解させる。
 - ⑦三者面談を活用し、生徒本人はもちろん、保護者の意向についても適切に把握し、学校・生徒・保護者が一体となって、学校の進路指導で生徒の進路実現を目指す。

本校は、進学指導推進校として、生徒の高い進路希望を実現させるべく、質の高い教育活動を行ってきた。今後もより高い目標（ゴール）を目指し、全教職員一丸となって学校改革を進め、生徒の進路希望実現と、生徒・保護者・地域の期待に応えられる学校づくりを更に推進する。